

# 浪江の



# こころ通信

・第30号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先が見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏（7県）の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信／第30号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218





## 川村 博さん(幾世橋)

取材者：浪江町役場 舩田・嶋原  
取材日：11月7日

### ふるさとを次の世代に繋ぎたい

川村さんは、ご家族と離れて南相馬に1人で暮らしています。特定非営利活動法人Jin代表として高齢者のための「サポートセンター」や各種障がい者福祉サービス事業を運営しながら、県・町の協力を得て町内で養鶏と農作物の試験栽培を行っています。今後は、畑にチューリップなどを植えて、皆さんにふるさとを綺麗だと思ってもらえるようにしていきたいとおっしゃいます。



▲町内の試験栽培場にて (幾世橋)

震災後、3月22日まで一緒に避難していたデイサービスの最後の利用者さんを無事家族へ送り届けて利用者支援を終わりました。その後は、生活不活発病予防のために1次避難所の体育館に「ゲリラ体操だ!」と言って訪れ皆さんと体操をしたり、入浴や通院の手伝いをしました。2次避難所でも月曜から金曜までずっと体操をしていました。その後、避難先各所において高齢者や障がい者支援の事業を展開し、昨年4月南相馬市に「サラタ農園」を開設して無農薬野菜を栽培しています。全国の方

が応援してくれて、多い時には月に100人程のボランティアが来てくれます。遠くは九州、外国の方やリピーターもいます。忘れないで来てくれてありがとうございますと感謝の気持ちを申し上げます。農作業を手伝っていただいています。また、私達の法人の活動をまとめた映像を見ながら1時間話を聞いてもらっています。ボランティアの方が帰ってから伝えてくれるのは大切なことだと思います。来てもらうことで初めてわかることがあります。全国から野菜を買いたい、販売するから送ってほしいなど沢山のメッセージもいただきます。何もしていない農地は荒れてしまいます。ふるさとの美しい風景は農家が担っています。原産から20km圏内で試験栽培をするにあたって、県がモニターリングをまめにしてくれ、ずっとデータをとりながら町とも協力体制を進めています。鶏卵については許可を得て南相馬の道の駅で販売しています。もちろん放射性物質は不検出でとてもおいしい卵です。避難生活で体が弱ったり気持ち

ちが内向的になりがちなので、二本松や本宮の仮設の方に呼び掛けて、ここ浪江の農地に来てもらいジャガイモ掘りや草むしりをしてもらっています。参加された皆さんから「気持ちが清々している」と言っていたので、道を通る人が寄ってくださり、「畑が綺麗になっていいのを見ることが洗われる」とも言われます。ふるさとを綺麗じゃなきゃだめだと思えます。帰ってきた人にふるさとを綺麗だと思ってもらうために春に向けてチューリップ6,600個を畑に植える予定です。「花は人を呼ぶ」ですね。今やっていることはやめれば終わりですけど、可能性はゼロでないからやるしかないと思います。糸口を探しているのやってみようと思っています。価値観は人それぞれですが、自立はしていかなければいけないと思います。子どもたちには頑張る姿を見せるのが大人だと思います。次の世代に責任を持って繋いでいく努力をしなければいけないと僕は思っています。



## 今泉 翔太さん(川添)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：11月9日

### 甲子園の先導役を務めた思い出を胸に、夢に向かって

秋晴れの11月9日、本宮市白沢総合支所(浪江町本宮出張所)に程近い「白沢運動場」で、町長杯ソフトボール大会が開催されました。出場した8チームのひとつ、「トッピーズ」の選手として参加した今泉翔太さんを訪ねました。

残念ながらチームは1回戦で敗退してしまいましたが、高校野球らしい深淵としたバッティングや守りの固いセンターのプレーに、対戦チームSSBの選手たちからも盛んな声援が飛んでいました。



■野球を続けるために、福島東高に転校

2011年3月11日は中学校の卒業式で、地震が起きた時には家に帰っていません。母は祖母と妹を連れて車で出かけており、家には僕と父、それから祖父もいたかもしれません。家の一部が壊れましたが僕たちは無事で、その夜は近所の人たちと一緒に焚火をしたりしながら、車の中で過ごしました。翌朝、母の実家のある葛尾村に、家族6人と近所の人たち3世帯で避難し、3日間過ごしました。その後、福島市のあづま運動公園の避難所に3、4カ月いて、それから市内荒井の借上げ住宅に移りました。避難所の生活は

本当に長く感じられました。僕は福島県立双葉高校に進学が内定していましたが、避難先の福島市にある福島東高校の転入試験を受けて転校することが出来ました。小学校の時から中学校までずっと野球をしていましたし、何とか続けたいと思っていましたから、野球部に入部しました。シヨートを任せられ、3年生になった今年の春は東北大会ベスト4、夏は県大会ベスト4になり、いい成績を残すことが出来ました。■甲子園の思い出は強烈です 福島東高ナインは残念ながら甲子園出場には至りませんでした。今年夏の全国高校野球大会の開会式と始球式に、東日本



▲ひとつひとつの質問に丁寧に答えてくれた翔太さん

▶バッターボックスに立つ凛々しい姿

大震災の被災3県から地方大会で活躍した高校球児3人が選ばれ、僕は甲子園での開会式の先導役を務めました。ともかく、初めて味わった物凄く緊張感でしたね。周りの観客の声援は、僕がこれまでに体験したことのない大きなものでした。甲子園球場はスタンドが高く、球場全体に囲まれているような印象を受けました。■社会を担う若者として活躍したい 来春、埼玉県内の大学に野球推薦で進学することが決まっています。この大学の野球部は関甲新学生リーグに加盟しており、選手としてこれから活躍出来るよう頑張りたいです。福島東高の選手は引退しましたが、野球部の練習は続けています。僕の野球好きは、たぶん父の影響が大きいですね。祖父もプロ野球好きで、小さい頃から家の中では野球の話が多かったです。僕は将来、教員になって、出来れば高校野球の監督を目指したいです。これからは、僕らが主役となって社会で活躍することになると思いますが、ばらばらになつてしまった浪江の友だちもまた、社会人として活躍している姿で会えることを願っています。



# 「浪江のこころプロジェクト」取材協力者情報交換会を開催しました



10月12日、取材協力者情報交換会の様子 (郡山市市民交流プラザ)

町と一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムとの協働により進められている「浪江のこころプロジェクト」では、長期化する避難生活や先の見えない不安の中で、町民がどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのかを発信し、町民の思いをつなげるために「浪江のこころ通信」を発行してきました。

この取材協力者が集まる情報交換会「浪江のこころ通信」これまで「これから」が、10月12日、13日の2日間にわたって開催されました。北は秋田県、南は沖縄県まで全国各地の取材協力者が集い、プロジェクトのこれまでの取り組みについて振り返り、各地の状況についての情報交換や浪江町内への視察等を行いながら、今後のプロジェクトのあり方について議論を深めました。



10月13日、町内視察の様子 (ふれあいセンター、仮置き場)

とても素晴らしい経験をさせていただきました。町長さんをはじめ現場の方々の苦悩や熱い思いを目の当たりにし、その翌日には、荒涼とした、それでも海も山も空も心地よい南相馬や浪江の現場に立ち、そこから避難している方々のことを考えるとき胸ふさがれる思いがしました。

**参加者コメント**  
NPO法人 あきたパートナーシップ 高杉 静子 さん

時間がたてば避難先に慣れると思っていた私は、どんなにか皆さんが望郷の念を抱きながら生活しているかを思い知った気がしました。 私たちのできることは少ないかもしれないけれど、一人でも多くの被災者の方の心が少しでも安らかでありますようにと、あらためて感じました。 私たちは秋田でも避難者の買い物支援やIT支援をしています。 明後日も、浪江からいらした方にもお目にかかります。 全国各地の皆さんに会えたこともとても嬉しかったことの一つです。 皆さんもどうぞお元気で過ごしてくださいませ。 ようお祈りしております。 ありがとうございます (10月15日)



## 神長倉豊隆さん(酒田)

取材者：浪江町役場 舛田・鳴原  
取材日：11月6日

### 浪江で“一人でできる花屋”を再開するのが夢

昭和27年開業の「美花」2代目としてフラワーショップを経営されていた神長倉豊隆さんは、現在、奥様と娘さんと3人で郡山市にお住まいです。NPO新町なみえの理事長として、各地の交流会や盆踊り、十日市祭など町民の絆づくりの活動をなさっています。



震災当日は中学校の卒業式などがあり忙しい日で、妻と息子は配達に出掛け店には娘と2人で落ちた。激しい揺れのため花瓶が落ちました。家族は無事でした。自宅は被害が少なく、夜は居間で家族8人が一緒に休みました。翌日、防災無線などで避難指示を知り津島へ避難し、3日後、二本松の花屋の友人からの連絡で妻と娘の3人で避難させてもらいました。そこで3月いっぱいお世話になり、4月から郡山にアパートを借りて現在まで住んでいます。息子夫婦

と3人の孫は息子の友人からの連絡で津島からいわきなどを經由し、今はお嫁さんのおばさんが住んでいる横浜に避難しています。避難生活が短く終わってほしいという気持ちとは矛盾していますが、息子には時間がかかるかもしれないのでこれからの生活をしっかりとるように話しました。 浪江では商工会の商業部会長だったので、事業再開のために何かしたい、復興のために何かしたいという思いがありました。5月の総代会でNPO新町なみえのメンバーとなる仲間との出会いがあり、まずは新町通りでやっていた盆踊りをしようということになり二本松で開催しました。当日は浪江の人達3、000人が集まり、沢山の出会いから人が集まる重要性がわかり十日市祭もやろうということになりました。規模は浪江の3分の1ですが二本松での開催は数十倍大変です。でも、苦勞の甲斐があり初年度は3万人の人出で遠くは九州から来てくれた方もいました。実はこの時に忘れられない出来事があります。い

わきの借上げ住宅に一人暮らしをしている90歳近いおばあさんが何度も列車を乗り換えて杖を突きながら来てくれて「浪江の人に会いたかった。」と、涙ぐんで話されました。やっぴいことがひとつの絆になる、お祭りは生きる元氣や勇氣を与えてくれると思いました。 お祭りだけでなくこれまでしてきた団体としての活動が人に喜んでもらっているのは良かったです。世代をつないでも浪江で子どもたちが安心して暮らしていけるふるさとを町づくりをしていきたいと思います。 しばらくはNPOの仕事ですが、いつか浪江で花屋を開きたいと思っています。「浪江での事業再開は俺の夢だ。」と、仲間にはいつも話しています。